

随感



普通のこと

2009年も残り僅かとなりました。今年はどんな1年だったのでしょうか。

今月の随感は年末号ということで、島田附属病院長と川上附属さいたま医療センター長、お二人にご執筆いただきました。今年を振り返って思われること、日頃お考えになっていることなど、それぞれお話しいただきました。

附属病院長

島田 和幸

2009年、政治の世界は大転換の年であった。新政権発足後のパフォーマンスが際立っただけに、これで自民党政治は終焉するかも知れないと、多くの人が予感しているのではないだろうか。民主党の本当の実力者は小沢一郎幹事長だという。小沢一郎は、かつて「日本は普通の国家にならないといけない」と言った。私は、そう主張した彼の政治的論点を正確に知っている訳ではないが、日本は根本的欠落部分があるために普通の国になり得ていない、という考え方には共感するところがある。

最近、母校の中学の創立五十周年での記念講演を引き受けた。突然の幼馴染みからの依頼だったので、簡単に引き受けてしまって、後で後悔した。中学生にどんな話をしたら良いのか、みんなの役に立つ話はあるのか全く自信がなかった。実際に母校を訪れてみると、大変立派な校舎が2、3年前に新築されていた。廊下はすこぶる広く、教室以外の各種のファンクションルーム（音楽室、書道室、理科室、集会室など）があり、図書室、体育館は校舎と一体になって一つの建物内に設計されていた。ふるさとの市町村が合併した後、新庁舎を建てるかわりに、各地の学校を視察・研究して校舎を新築したとのことであった。校長先生やPTAの役員、同級生の方に案内されているうちに、こういう恵まれた環境で学ぶ後輩たちを是非元気づけてやろうとの思いが強くなった。

当日、中学生、教師、父兄、来賓の方々に前して、私が「学校は何をする処か？」と子どもたちに尋ねると、勢い良く「勉強するところ」という答えが返って来た。私は、「その通り、そしてまた学校は、先生や友人と交流することにより社会性を身につけるところでもある」と続けた。勉強は、一に「記憶すること」、すなわち記憶する為には理解して反芻する、二に「習うこと」、すなわち習う為には真似て理解する、そして「考えること」、すなわち考える為にはものごとを疑って、自由に発想する、最後に勉強ができるようになるためには、「予習／復習をしっかりとすることが大事である」と加えた。将来、農業、商業、工業、医療、芸術など、どんな分野に進んでも、勉強は大事で、その心構えは変わらない。

では、「家庭は何をする処か？」と尋ねると、「寝るところ」とこれも大きな声で返事が返って来た。寝るところには間違いなが、私は「家庭は寝るところ」であると断言した。人間は、放ったらかしにしておくでサル以上にならない。人にあいさつをする、人にうそをつかない、人に迷惑をかけない、弱いものを助ける、卑怯なことをしない、親の言う事をきく、人のためになる・・・、このような人間としての基本は、人類が五千年かけて、親

から子に、子から孫に伝え続けて来たことで、“それは何故かと疑う”余地はない。動物の中で、唯一人間だけが親が子に自分の経験を伝えられる。

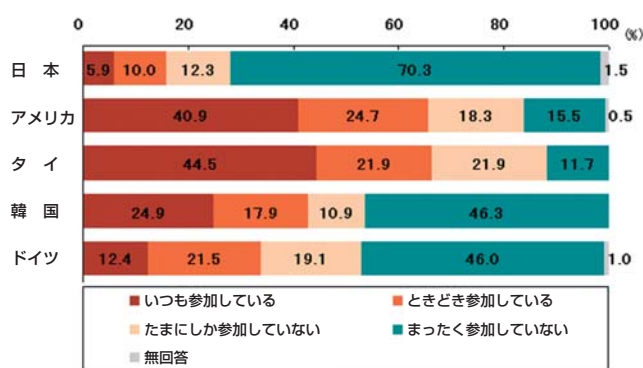
明治以来、特に戦後、日本が目標とした民主主義や個人主義とは何か？個人主義とは各人が自分の好きなことを追求することである。人は本当に好きなことをやることによって、真に自分を活かすことができる。そのように個人個人が自分を活かすことによって、それぞれが社会に貢献する。それによって成り立つのが民主主義社会である。よく躰けられた個人が真の個人主義を全うすることが、これからの社会の進むべき方向である。恵まれた環境で学ぶ皆さんに精一杯のエールを送りたい。がんばりましょう。

以上のような趣旨のことを話した。後に中学時代の恩師や現役時代教師であった同級生から、大事な話をずばって言うてくれて大変良かったとの感想を頂いた。学校は勉強するところであり、家庭は躰けるところであるという「普通のこと」がストレートに表現できない現場があるのかも知れないとそのとき感じた。

子どもの教育から百八十度話は変わって、高齢者の問題にも少しだけ触れた。人間は、必ず死ぬ。その死を見つめたとき、宗教が生まれたと思う。現代の日本人は、死というものに直面したとき初めて、宗教を探す。そして、自分はその宗教の教え、内容に納得できるかどうか考える。しかし、一昔前の日本人、私の祖父母の世代までは、そして今でも他国の人の多くは、宗教は考える対象ではなく、疑うものでもない。既に大昔の聖人や高僧が我々の為を考えに考え抜いてくれた結果として、現在まで生き残った宗教があるのであり、我々凡人にとって、それはそのまま信じる対象である。我々は宗教を日常化しさえすれば良いのである。

十数年くらい前の内閣府の調査で、六十五歳以上のアメリカ人やタイ人、韓国人は、日常宗教活動に参加している人が五十～七十パーセント近くいるのに、日本のそれはたった十五パーセントだった(図)。高齢者の終末期医療はどうあるべきか、これはどう生きるかではなく、どう死ぬかの問題であって、そこに日常化された宗教があるのとないのとは、相当大的な違いが生じてくる可能性がある。日本人の高齢者の現状は、やはり「普通のこと」ではない。宗教も「躰け」と同じようなものかも知れない。疑う余地も無く、親から子に、子から孫に伝えて行くべきものではなかったのだろうか。

生まれ、育ち、そして死んで行く、人間はそれを単なる個人のサイクルとはせず、その中から人類共通で普遍なものを倫理、道徳、宗教などとして後世に受け継いで行った。かつては「普通のこと」が普通のこととして通用した。現代日本社会が混迷すればするほど、自由な発想を駆使して新たな社会を創出する必要に迫られれば迫られるほど、基本に戻ることが今ほど必要なときはないように思う。



高齢者の宗教活動に対する国際比較調査

内閣府政策統括官 平成7年基礎調査より

http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h07_kiso/a_11_04.htm